

The Japanese Dragon Troupe in Vienna in 1867  
after the Paris Universal Exposition

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 若宮, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1177">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1177</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 1867年パリ万博後のウィーンにおける日本ドラゴン一座

The Japanese Dragon Troupe in Vienna in 1867 after the Paris Universal Exposition

若宮由美

WAKAMIYA, Yumi

## 1. はじめに

1867年はフランスのパリで万国博覧会の年であった。ヨーロッパ各国が力を注いでパリ万博を盛り上げ、ウィーンのヨハン・シュトラウス 2 世 Johann Strauss Sohn (1825-99) もパリに赴いた。そして、パリで彼の〈美しく青きドナウ An der schönen, blauen Donau〉op.314は大成功を収め、逆輸入の形でウィーンに戻る<sup>1)</sup>。また、パリ万博は日本が初めて参加したことでも知られる。幕府ばかりでなく、薩摩藩と佐賀藩が出品した。さらに、パリには芸者<sup>2)</sup>を置き、日本人芸人も送る。その芸人が、松井源水一座と帝国日本人一座<sup>3)</sup>である。芸人一座の活動は多くの本や論文にまとめられている。しかし、その年のウィーンとなると、たちまち日本人芸人の姿が漠然とするのである。これについて昨年の拙稿では、1870年の帝国日本人一座の活動を解明したが、1870年が日本人のウィーン初登場ではなかったと知られる。今回は1870年以前のウィーンで興行を行った日本人に焦点をあてる。

## 2. ドラゴン一座のウィーンへの予告

パリ万国博覧会は1867年11月3日に閉幕す

る。しかし、それよりも前の10月30日に、ウィーンの新報各紙に「予告広告 Vorläufige Anzeige」が出される。まずは、新報各紙を分析してみる。まず、*Wiener Zeitung*紙に「予告広告」が掲載されている（1867年10月30日、S. 8）。ウィーンの準公式新聞といわれる同紙が、この「予告広告」を出した事実が大きい。次に、ハンスリック Eduard Haslick (1825-1904) が音楽論表を担当する*Neue Freie Presse*紙（同日、S.8）。そして、*Die Presse*紙（同日、S.12）、*Morgen-Post*紙（同日、S.3）、*Neues Fremden-Blatt*紙（同日、S.20）も掲載した。文面はすべて一緒であり、紙面の大きさと字体には各社に差が出る。なかでも*Neus Fremden-Blatt*紙は新聞約半頁に及ぶ「予告広告」になっている（図版1）。

まずは、その文面をみてみよう。

サーカス・レンツ

暫定的な告知

女王ヴィクトリアとその家族のパトロンのもとにある

江戸の偉大なるグレート・ドラゴン劇場より日本ドラゴン一座

ウィーンの新報ではどの新聞も日本のことは

キーワード：グレート・ドラゴン一座、サーカス・レンツ、シュトラウス

Key words : Great Dragon Troupe, Circus Lenz, Strauss

ほとんど伝えられない時代に、この「予告広告」は目を引くものであった。さらに続きを読んでみよう。

アメリカ南部での驚嘆すべき成果をよび、目下のベルリンでも観客から巨大な評価を得、また王立ハウスの別の観客からも拍手喝采を浴びている。この一座がまもなく、ここにやって来ようとしている。

一座は24人で、これには男女の両方が含まれる。日本では国を離れることが禁止されていたため、彼らが最初の日本人である。

団員は、全部が日本の伝統的な衣装で演技をする。他の事柄は、上演の時に見ることができる。／個々の団員の名前と演目は近々に掲示板に示されるだろう。座席の値段は、通例通り、レンツ氏によって決まる。

／監督：G.ウォレス、E.バート。

「予告広告」は、以上のものであった。彼らがアメリカ公演をしたことからみて、東回りでヨーロッパに来ていることがわかる。広告から明らかになるヨーロッパの地名は、ベルリンだけで、もうすぐウィーンに到着するらしい。監督はウォルシュとバートの2人ということになる。

1日置いて、11月1日（金）に同じ「予告広告」が出されている<sup>4)</sup>。文面はまるで同じである。その後は、約1ヵ月の間は新聞の上では何もなく過ぎる。とりあえず、この段階でこの「予告広告」がほとんどの新聞に出されたことは、主催者側に財力があったに違いない。

後になってしまったが、団体名の訳について述べておく。この一座はひじょうに長いドイツ語の名称を持つことがわかる。Japanesische Drachen-Truppe vom Great Dragoon-Theater in Yeddoであるが、本論ではドラゴン一座に表記を統一する。

### 3. ドラゴン一座のウィーンでの興行

次に広告が新聞に載るのは1ヵ月後の11月28日（木）であり、本公演を宣伝している。

サーカス・レンツ

日本ドラゴン一座（江戸にある偉大なるグレート・ドラゴン劇場より）

アメリカ南部での驚嘆すべき成果をよび、いまはヨーロッパ、つまりはロンドン、パリ、ベルリンでも喝采を浴びた

12月1日日曜／サーカス・レンツでの公演



図版 1 : 1867年10月30日付の  
Neues Fremden-Blatt紙

がスタート

詳細はチラシにて／G.ウォレス、E.バート  
サンフランシスコ出身

内容は簡素になったが、実際の日付が記されたのは初めてである。掲載誌は*Wiener Zeitung*紙（1867年11月29日、S.7）、*Neue Freie Presse*紙（同日、S.11）、*Die Presse*紙（同、S.10）、*Neus Fremden-Blatt*紙（同日、S.8）である。太字の部分は*Neue Freie Presse*紙には載っていない部分であり、*Morgen-Post*紙には掲載がない。翌29日（金）と翌々日30日（土）にも同じ文面の広告が出された。この広告が明らかにする事実には、監督官がサンフランシスコの出身であるということだ。その他、上演地でロンドンとパリも明らかになった。そして上演日を迎える。1867年12月1日付の*Wiener Zeitung*紙（S.10）を示す。

サーカス・レンツ

12月1日日曜／最初の公演

日本ドラゴン一座（江戸にある偉大なるグレート・ドラゴン劇場より）

アメリカ南部での驚嘆すべき成果をよび、いまはヨーロッパ、つまりはダブリン、ロンドン、パリ、ベルリンでも喝采を浴びた座席の値段：1つのロージェ（5人用）8フロリン50クロイツァー、ロージェの1座席1フロリン80クロイツァー、シュペールの座席1フロリン30クロイツァー、1階席1フロリン30クロイツァー、アンフィテアターの座席1フロリン30クロイツァー、1階立見90クロイツァー、2階立見60クロイツァー、3階立見30クロイツァー、10歳以下の子供90クロイツァーまたは60クロイツァーの半額。

入場券：公演のある日は10時からサーカスの窓口で受け取れる

詳細なプログラムは夕方にあらかじめ受け取れる

開場6時、開演7時

12月2日月曜：／第2回公演

G.ウォレス、E.バート サンフランシスコ出身

この広告では、上演地でダブリンに初めて触れているほか、値段がわかる。サーカスでは1階席1フロリン30クロイツァーであるのに対し、宮廷王立歌劇場の1階席が2フロリン40クロイツァー<sup>5)</sup>、**図版2**（右）に示した帝室造園協会「花のホール」でのシュトラウス楽団は40クロイツァー（*Neues Fremden-Blatt*, S.21）である。

毎日公演は続き、公演の予定もわかってきた。普段は7時開演の1回公演である、日曜だけ4時と7時の2回公演がなされた。演目に関しては、12月9日（月）に初めて記述がでてくる。初演される「Japanersische(r) Blumentopf」という演目である<sup>6)</sup>。「蝶の鉢」とでも訳せようか。ただし、演目の中身という所までは本論では解明に至らなかった。

12月4日（水）に各新聞の記事は短くなり<sup>7)</sup>、さらに*Wiener Zeitung*紙、*Neue Freie Presse*紙では12月10日（木）に記事はなくなり、*Die Presse*紙（1867年12月10日、S.12）や*Neues Fremden-Blatt*紙（同日、S.21）、*Morgen-Post*紙（同日、S.4）では、チケットの販売場所の記述のみとなる。そして、12月11日、12日はどこの新聞にも掲載がなく、12月13日（金）になり、「Wichtig! Wichtig!(重要!重要!)」と呼びかけて、あと3日となった公演をほとんどの新聞をあげて知らせている<sup>8)</sup>。そして、*Die Presse*紙と*Morgen-Post*紙を除き、各新聞で広告は最後の日まで変わらなかった<sup>9)</sup>。12月15日（日）をもって、一応、公演は終了

したことがわかる。

#### 4. ドラゴン一座の追加公演

12月25日（水）になって、*Wiener Zeitung* 紙を除く新聞に、ドラゴン一座の公演案内が掲載される。公演は明日からとあるが12月26日（木）は日刊紙の休刊日にあたる。

この宣伝では、おもつさんの初登場をわざわざあげている。「おもつさん（嬢）は、重い病気のため休演していたが、揺れ動く糸（複数）の上を、みえない針金やバランスを取る棒を使わずに、すばらしい演技をする人で、ウィーン初登場」<sup>10)</sup>。おもつさんの演目は、三原文の『日本人登場』でいう「ゆるみ綱渡り」（三原：99）と思われるが、評判のひとつであった。12月27日の*Neue Freie Presse*紙（S.5）では、この新聞だけFräulein Omotusanをタイトルのように大きな文字で扱っている。彼女はそれほど重要な役どころであったといえる。彼女の病気はKrankheitの訳であり、それ以上の詳細はわからない。広告で

はさらに、ウィーンで初登場となる演目として、「絞首台への大はしご grosse(r) Galgeuleiter」があげられている。ただし、これも誰が演じるかが不明である。

公演は毎日続き、12月29日（日）には2公演がなされる。「おもつさん」ばかりでなく、O'Sheinisan und Little Tommy（絞首台はしご）を大きい字で掲載している<sup>11)</sup>。前者はおせんさん。後者はトラキチ（寅吉）と思われる。寅吉は子役であることがわかっており、軽業を得意とした（三原：98）。12月30日（月）は1公演があり、12月31日（火）は休演、1868年1月1日（水）に2公演があり、単独の公演は終了となる。

それから2日あけて、1月4日（土）に「タレントの大連合祭！2日間だけ！」(*Fremden-Blatt*, S.8)と広告が出され、明日（日）と6日（月）の2日間の宣伝が出る。続く5日も同じ広告が出ているので、ここではその日の宣伝を写真として載せる（図版2：左）。

「両日ともに2公演、4時と7時／日本ドラ

**Nr. 5. Sonntag 11. Beilage des „Fremden-Blatt“, 5. Jänner. 1868.**

**Circus Benz.**  
Große Kombination von Talenten!  
Nur für 2 Tage!  
**Sonntag und Montag,**  
den 5. und 6. Jänner.  
An beiden Tagen 2 Vorstellungen, um 4 Uhr Nachmittags  
und 7 Uhr Abends.  
**Die Japanische  
Drachen - Truppe**  
in ihren größten Balancetänzen und Vorstellungen auf  
den Telegrafendrähten.  
Mit enormen Kosten sind:  
**Sgr. Kotrelli und seine 3 Söhne**  
vom Circus Napoleon in Paris, wo sie die größte Sen-  
sation durch ihre wundervollen akrobatischen und gym-  
nastischen Künste erragt haben,  
gewonnen worden. Desgleichen:  
**Sgr. Banfretti, der größte Clown**  
von dem großen amerikanischen Circus Holborn in  
London, und  
**Sgr. Rossi, der unver-  
gleichliche  
Clown**  
vom Kaiserl. Circus in Paris.  
Die Japaner reisen am Dienstag nach Peters-  
burg ab und die Montags-Vorstellung ist positiv  
die letzte in Wien.  
Preise wie gewöhnlich.

**Blumen - Säle**  
der k. k. Gartenbau - Gesellschaft.  
Heute Sonntag:  
**CONCERT**  
von  
**Josef & Eduard Strauss.**

**PROGRAMM:**  
1. **Introduction und Chor** aus der Oper: „Die Hugenotten“ von Meyerbeer. — 2. „**Alten-  
weibel**“, großes Potpourri von Johann Strauß. — 3. **Polyvortrag** aus der Oper: „Die Rhein-  
niden“, von Offenbach. — 4. **Neu zum ersten Male:** „**Ständchen**“, von Ch. Coumou. — 5. „**An  
der schönen blauen Donau**“, Walzer von Joh. Strauß. — 6. „**Postillon d'Amour**“, Polka  
franz. von Joh. Strauß. — 7. „**Delirien**“, Walzer von Josef Strauß. — 8. **Neu, zum ersten Male:**  
„**Coqpolka**“, von Josef Strauß. — 9. „**Tanz-Parole**“, Polka franz. von Eduard Strauß. —  
10. „**Bewegtes Leben**“, Polka schnell von Ed. Strauß.

Anfang 4 Uhr. — Ende um 8 Uhr. — Eintrittspreis 40 kr.  
Programm frei an der Kasse.

図版2：サーカス・レンツ（左）とシュトラウス楽団（右）の広告

ゴン一座／バランスを取る演技と細い針金上の出し物／一緒に演じる偉大なるキャストは／すばらしいセンセーションとアクロバティックで体育的な技術を持つ、パリのナポレオン・サーカスから来た／コトレリ氏と3人の息子／同じく／ロンドンにいる、偉大なるアメリカ人のホルボルト・サーカスから／クラウン、ザンフレッティ氏／そして／パリの王立サーカスから／比類なきクラウン、ロッシ氏」(Fremden-Blatt, S.17)。そして最後に、「日本人たちは火曜にペテルブルクに出立するので、月曜の公演がウィーンにおける実際の最後となる」(同上、S.17)と記されている<sup>12)</sup>。火曜にウィーンを出発するというのは、いままでに見た記述としては一番実証的である。この両日、人気の高さゆえに合同で見世物を行ったと考えられる。ぎりぎりのデッド・ラインまで、ウィーンでの興行を行い、翌日同地を出発したのであろう。ただ、それを裏付ける証拠となると、難しい。

一番初めの10月末の広告でも発表したように、サーカス小屋の掲示板に役者の名前や持ち芸を示すと書かれた「引き札」が個々の芸を知るには重要である。ドラゴン一座が24人とされているが、これも本当かは判断できないし、本当は何人いたかさえ把握できない。

## 5. 新聞批評

次に、新聞記者が記した新聞批評からドラゴン一座の記録を探ってみる。新聞に批評が掲載されるのは、初日、すなわち1867年12月1日の公演が終わった翌日である。12月2日付のMorgen-Post紙(S.2)には次のように論じられた。

昨日、日本の旅芸人の一座が、観客の途方もない大混雑のなかで公演を始めた。外

国人だと人目でわかるベスト、オリエンタルな衣装も、一見の価値がある。アジア人の旅芸人の本で説明されているような、伝説的な芸がここで実際にみられ、驚くべき数々の出し物が芸術の名のもとに成り立っている。もちろん、私たちは曲芸やバランスを取る作品のひとつひとつに対して名を挙げることはできないが、予期せぬことでびっくりさせられる芸ややわらかい絹から蝶がでてくる芸、ならびに桶を使った「バランスのなせる芸」などが心を躍らせた。なかでも、桶の芸では子どもが軽業師の名声を得た。昨日は、この小さな少年が観客の「人気者」になり、拍手喝采が繰り返された。

公演が大盛況で、子どもの人気が高かったことがわかる。次に、同日のWiener Zeitung紙(S.2)をあげよう。この批評はそれよりも長いですが、要点をあげる。

昨日よりウィーンも日本の旅芸人一座が演技をする場所となった。サーカス・レンツは、ドラゴン一座の演技により、おどろきのあまり呆然と見つめる場所になった…実際、日本人がバランスを取る技術がいかに優れているかがわかった。“しなやかさ”のために、手だけでなく、足をも使うとは、ファンに歓迎されるものだ。Kikou-Mats-KeeとHa-no-san、そして小さいOa-Tah — この名前の正しい書き方と発音を何度も尋ねた — は、予想もつかない高さに達しており、名前を挙げて称える者である…

第1部の後半になるにつれて、喝采や興味は次第に盛り上がっていき、プログラムの第2部になると、ますます“もう一度”という声が高まっていった…

Wiener Zeitung紙の記者では、役者の個人名

を挙げて芸を称賛している。ウィーンにおける団員の記録はないが、1867年5月29日のカリフォルニアの*Alta California*紙に掲載された、ドラゴン一座の広告と見比べてみると、Kikou-Mats-Keeはカワシママンキチ、すなわち萬吉で足芸差し手、Ha-no-sanはハルキチ、すなわち春吉（日本のリズリー）、Oa-Tahはオータゲンザブロー（桶の曲、上乗り）であったようだ<sup>13)</sup>。一座を率いる萬吉と、あとは春吉とオータゲンザブローが人気であった。演目の内容でわかるのは、蝶のトリックを使った芸と桶を使った力業があったという点である。*Wiener Zeitung*紙の記者は、軽業・力業の方に肩入れしているようである。ただし、新聞各紙が絶賛した訳ではない。*Neues Fremden-Blatt*紙では「単調であった」（1867年12月2日、S.5）と指摘しているものもある。

## 6. ドラゴン一座の素性

日本の先行研究から、ドラゴン一座のことを考察する。日本は江戸時代に幕府の鎖国令がだされて以来、約250年近く海外との交流を絶ってきた。1854年、江戸幕府はアメリカ東印度艦隊司令長官ペリー Matthew Perry (1794-1858) と和親条約を調停するに至る。これにより外国への機運が高まり、1858年(安政6年) についにアメリカへ幕府の遣米使節が派遣される。一般人の渡航が認められるのは、1866年(慶應2年) 「海外渡航差許布告」が江戸幕府から発表されてからである。1866年11月23日(慶應2年10月17日) 付に「御印章」(当時のパスポート) 第1号を外国奉行から授けられたのは芸人一座である。この一座が「帝国日本人一座」であり、御印章の第18号までの商用(米国) の2年の「御印章」を外国奉行から託された。それに続く「御印

章」の第19~27号までは同じく芸人一座の松井源水一座があり、商用(英国) 2年のパスポートを、これとは別に小三吉ら5名も神奈川奉行から英国2年の御印章を取得し、鳥潟小三吉一座として海外への公演を目指す。目指したのは、1867年に開かれるパリ万国博覧会であり、帝国日本人一座がアメリカ回り(東回り)、その他のものがアジア回り(西回り) でパリを目指した。彼らの出立が1日を競うものであったのは確かだ。

1867年7月頃にまず松井源水一座がパリに入り興行し、続いて10日ほど遅れて帝国日本人一座がパリに到着した。一方、幕府はフランス公使ロッシュ Léon Roches (1809-1901) の勧めに従い、パリ万博への参加を決め、將軍名代として徳川慶喜の弟、徳川昭武(1853-1910) を派遣した。昭武は当時14歳であった。彼は随行20数名とともに1867年1月11日に横浜でフランス船に乗船し、3月初旬にマルセイユに到着した。徳川昭武は7月頃にまず松井源水一座をフランス帝国劇場Théâtre du Prince Impérial(宮永:83) で、7月27日に帝国日本人一座の初日公演をナポレオン円形劇場Cirque Napoleonで観劇した(宮永:84-85)。その日のうちに同一座の楽屋に使いをやり、花代50両という金額を贈っている(宮永:87-88)。当時の50両というのは、いまの価値で400万円位である<sup>14)</sup>。その他、パリ万博に参加したかは別にして、海外を目指した団体は他にも多くあったのだ。

例えば、帝国日本人一座以前に、非合法でアメリカへの渡った鉄割一座がいた。ちょうど、帝国日本人一座とアメリカでの活動時期を同じくしていたが、ヨーロッパへは渡っていないようである。そして、帝国日本人一座より遅れて合法的にアメリカの地に赴いたの

は、1867年4月28日に横浜を旅立ったミカド一座 Mikado Troupeである（宮岡：16）。5月28日にサンフランシスコに降り、7月4日にパナマ経由でニューヨークに到着する（三原：86, 90）。その後もミカド一座はアメリカ大陸を巡業するようだ。さらに、5月2日に日本を立ったのがドラゴン一座である（三原：90）。6月5日にサンフランシスコに降り立ち、7月11日にニューヨークに到着する（三原、88-90）。この一座が本論で扱うドラゴン一座である。

ミカド一座とドラゴン一座の関係は双子といわれるのも無理はない。少なくともアメリカではそういう関係にあった。ミカド一座は6月3日にマクガイアー Thomas Maguire (1820?-96) のアカデミー・オブ・ミュージック Academy of Musicで幕を開けるが、初日もバランスを崩し危ないところであり、翌4日には「崩れ梯子」の上乗り子役が倒れてきた竹で頭を打ってしまい、中1日おいて6日には「刀梯子」の芸に取り掛かった者が足を滑らせ、血だらけ足を引きずって退場してしまう（三原：90）。当初は数週間の興行を当て込んでいたが、結局1週間の興行に終わった。ミカド一座がニューヨークに旅立った6月10日に、ドラゴン一座はメトロポリタン劇場 Metropolitan Theatreで1週間の興行を始めている（三原：91）。そして、2週目の月曜には、恒例の特別公演が追加で生まれ、翌6月18日に惜しまれながら、パナマ行きのゴールデン・シティ号に乗った（三原：91）。「芸の上で何やら似たもの同士のミカド一座とドラゴン一座をこうして並べてみると、後者の方が興行的に格段優れていた様子が次第に浮かび上がってくる」（三原：91-92）。確かに、ドラゴン一座は7月11日にニューヨーク入り

して、7月15日にオリンピック劇場 Olympic Theatreでアラブの軽業一座 (Beni Zoug-Zoug) との合同公演を行い、7月24日にはリヴァプール行きへのクラ号に乗り込んでいる（三原：88-89）。一方のミカド一座は悪評され、大西洋を渡ることはなかったのである。

ドラゴン一座はヨーロッパを興行の地とし、パリ万博を目指したようである（三原：97）。しかし、帝国日本人一座と松井源水一座が徳川昭武を巻き込んだ本家争いをパリ万博の場で練り広げたばかりであり（三原：94）、勝負の上では2番煎じの印象はいなめない。結局、進路変更が行われたらしく、パリへの登場は2年ほど後の1869年である（三原：89）。この間のドラゴン一座はダブリンで1867年8月9～15日、ベルファスト、グラスゴーで3週間、エジンバラに移動して、1867年9月24日まで公演をしていた（小山：114）。その後、ヨーロッパ本土に渡り、1870年の新聞からハンブルク、ベルリン、サント・ペテルブルクを廻ったと知られる<sup>15)</sup>。しかし、どこにもウィーンの記述は出てこないのである。

## 7. 人材発掘と監督

日本人が初めて海外で公演をするにあたって、重要なのは一座を世話する外国人、この場合は監督と呼ばれる者である。濱碇定吉 (1831-?) の配下にあった帝国日本人一座は、力量的にも図抜けていただけでなく、リズリー先生 Richard R. Risley Carlisle (1814-74) の引率があったから名声を残せたのである。その活動は後見人の高野廣八 (1822-90) の日記を通して現代に伝わる<sup>16)</sup>。この帝国日本人一座の活躍をみて、外国人の側からすれば、軽業や曲芸の芸能一座を引き、海外に持っていくこうとする連中もでてきた。そのような中、



フィッシャー A.Fisher、バージェス Gustavus Burgess、マーシャル John R.Marshall、ギルバート Ferdinand Gilbert、ブレックマン Frederik Bleckman（1839-94、後年 タナカー・ブヒクロサン Tannaker Buhicrosan と名乗る）<sup>17)</sup>、ウォレス George Wallace、ボールドウィン Elias Jackson Baldwin（1828-1909）<sup>18)</sup> が1867年4月4日（慶應3年2月30日）に蒸気船ハーマンで横浜に着いた（小山：108）。

ドラゴン一座をつなぎを付けたのは、4人目以後の人たちである。ボールドウィンとギルバートが雇い主になり、ブレックマンとウォレスが実質的な世話係となった。とくにブレックマンは、20歳で長崎にやってきて、日本人の内妻おもとと3人の子どもまでもうけた人物で、イギリス公使館、その後はフランス公使館通訳をした男である。幕府の船の購入にからんで約2500万円の金を横領し、1865年にフランス公使館勤めは首になった経緯がある（小山：97-100）。そして、ウォレスは『続通信全覧』に「英国商人エルレンス雇小使米國行免許一件」にあるように、1867年の神奈川奉行においてドラゴン一座の即時旅券発給に力を発揮している（三原：97）。かなり日本語が上手だったようだ。ただ、彼が何をしていたかは不明である。

ギルバートはサンフランシスコでは興行主だったが、その後はバート Edward G.Bert に代わっている。彼は日本には出かけていないが、彼もサンフランシスコの興行師であり、ギルバートのオリンピック劇場 Olympic Theatre で責任者の任にあった（三原：126）。日曜に劇場をあけたために、1867年5～6月に警察裁判所に審理され、6月18日に判決を言い渡された。しかし、拘留の可能性もあるはずなのに、その日に即刻罰金を支払っている（三

原：126）。この日はドラゴン一座がニューヨークに出発した日である。この一座に同行するためであろう。サンフランシスコで仕事を受け、契約満了は2年後の1869年6月であった<sup>19)</sup>。

興行主はバートに代わったが、支配人としてはブレックマンがおそらくスコットランドまでは同行してだろう（小山：114）。その後、ブレックマンは名前もブヒロクサンに変え、何人かの団員を連れてタイクン一座 Tycoon Troupe としてオーストラリアへ向かう。団員はブヒロクサンを入れて男3人、女3人である（小山：117-118）<sup>20)</sup>。全員がドラゴン一座からの引き抜きかはわからない。いっぽう、本来のドラゴン一座はこの後、ヨーロッパ本土へ渡る。もともとウォレスも書記として同伴していたが、これ以後は監督となり、ウィーンではバート、ウォレスの監督体制になった。そして、サンフランシスコの最初の公演から、W氏という現場で演技の紹介をする人物がいた点であろう（三原：99）。W氏ははっきり言いきれないまでもないが、ウォレス氏と考えられよう。ウィーンの新聞の多くにドラゴン一座の宣伝を打った手法は、それを許すだけの経済的な余裕があったこともわかる。

最後にもうひとつの話をあけておこう。ブレックマンの内妻がドラゴン一座に含まれていたのである。日本でも長年連れ添い、ドラゴン一座とともに外国をまわるにいたって、「おもと」という名前で一座に加わったのである。神奈川奉行の第103号「茂野女」として「御印章」が彼女に下された（大鹿：181）。彼女は夫とともに、リヴァプールに出発する前にニューヨークでアメリカ人を一座が夕食に招待した際、ホスト役を引き受けている（小山：113）。彼女もかなりの英語力を持っていた。

この話だけでも驚きなのだが、ブレックマンがドラゴン一座を離れた時に、おもとさんは一座に残り、ウィーンでは12月26日に病気明けの「ゆるみ綱渡り」を演じた「おもつさん」と考えられるのである。後年、「おもとさん」はドラゴン一座の鏡味五太夫と結婚している(小山：180)<sup>21)</sup>。

## 8. カリフォルニアの広告との差異

ドラゴン一座がアメリカの地を踏んだのは、1867年6月5日である。それ以前の5月25日に*Alta California*紙に全員の名前と持ち芸を記した広告がだされたのは、前に記した。一座のメンバーは24人で、「二重梯子、竿上り、大気球使い、ぶらんこ飛移り、針金渡り、紙綱渡り、独楽まわし、奇術、手品、舞踊などヴァラエティーに富んだ男女の芸を見せている」<sup>22)</sup>(安岡：78)。しかし、ウィーンで団員24人とされたのは1867年10月に出た予告だけであり、この真偽はいまのところわからない。ただ、カリフォルニアの広告と5月経ったウィーンに広告を比べてみて、顕著に異なるのはドラゴン一座の出身地に関してである。FROM YOKOHAMA, JAPANとあり、FROM THE GREAT DRAGON THEATRE, OSAKAとあるのだ(三原：98)。確かに、人材斡旋をする外国人たちは横浜に到着した後、江戸へは行かず、大坂に向かった。その間、どのような交渉が行われたかはわからないが、1867年5月2日(慶應3年3月28日)に、フランス公使ロッシュの將軍徳川慶喜への初めての謁見が大坂城にて行われた。そこに余興としてミカド一座、ドラゴン一座、早竹虎吉一座があげられた事実がある(三原：96)。ドラゴン一座の団員は関西出身の者が多かったと想像される。当初、カリフォルニアで新聞広告

を出した時には、正確に「大坂出身の横浜出発」と記したのだが、それでは外国人に煩雑だということで「江戸」にしたと思われる。少なくとも、ウィーンの広告では江戸となっていた。「江戸」の響きは出所を示すばかりでなく、一番を想起させるものがある。一座の正式名称というのもの、その時々により書き換えたのが実情である。個々の芸までは、カリフォルニアのメンバー広告をみてもわからない。また、大坂にはグレート・ドラゴン劇場というものが、ドラゴン一座を送り出した後も存続していたとも考えられる。それゆえ、「グレート・ドラゴン劇場」という表記が紛らわしくも頻出するのだろう。

## 9. ウィーンの音楽事情

当時のウィーンではフランス万博以後を終えて、冬を迎えつつあった。劇場は宮廷劇場 Hofburgtheater、宮廷歌劇場 Hofopern Theater、アン・デア・ウィーン劇場 Theater an der Wien、カール劇場 Carl Theater、ヨーゼフシュタット劇場 Theater in der Josefstadt、ハーモニー劇場 Harmonie Theater、ルドルフスハイム劇場 Theater in Rudolfsheimが常設であり、とりわけ宮廷歌劇場とアン・デア・ウィーン劇場では音楽劇がかけられた。1867年12月をみれば、宮廷歌劇場では日替わりの劇を上演しているが、ここは取り立ててフランス物ばかりではなかった。一方のアン・デア・ウィーン劇場では《青髭 Blaubart》《ジェロルスタン女大公 Die Großherzogin von Gerolstein》《美しきエレヌ Die schöne Helena》など、オッフェンバックのオペレッタが中心であった。さらに、コンサートやダンスのための舞踏会、ツィターの音楽会、歌手を中心とした音楽会やビア・ホールのような所まで、あり

とあらゆるものが音楽に彩られていた。指揮者・作曲家にはツィラー Carl Michael Ziehrer (1843-1922) やフェールバッハ父子 Philipp Fahrbach (父1815-85、子1843-94) などがいた。そのようなウィーン音楽のひとつとして、1868年1月5日のシュトラウスの広告をみてみよう（図版2：右と表1）。

プログラムは上記の通りだが、その説明の前にシュトラウス一家の状況を少しみておく。ヨハン・シュトラウス2世は、1867年のパリ万国博覧会へ単身で乗り込み、演奏はビルゼ Benjamin Bilse (1816-1902) が率いるドイツの楽団 Bilse'sche Kapelleが担当した。〈美しく青きドナウ〉が爆発的な人気を得、フランス皇帝ナポレオン3世 Napoléon III (1808-73) から称賛を受けた。しかし、直前まで弟ヨーゼフとともにパリに行った末の決断だった。8月にロンドンに渡り、ここでも歓迎を受ける。必然的にウィーンに残ったヨーゼフ・シュトラウス Josef Strauss (1827-70) とエドゥアルト・シュトラウス Eduard Strauss (1835-1916) が楽団を運営していく形になる。ヨーゼフはこの夏には後年の病気の片鱗が出始め、バート・フーシュに湯治に行くが、9月末にはウィーンの仕事に戻る。ウィーンの仕事はヨハン抜きで行っており、ヨハンが楽団に顔を出すのは帝室造園協会の演奏会が始まった

12月のことである。

さて、造園協会のプログラムをみてみよう。ヨハンの曲はフランスで大喝采を浴びた〈美しく青きドナウ〉と伝語のタイトルを持つ〈愛の使者〉、そして大ポプリである。シュトラウス以外の曲でも、フランスの作曲家であるマイヤベーア、オッフエンバック、グノーでパリ万博を彷彿とさせている。そして、ヨーゼフとエドゥアルトの2曲が加わる。これほどフランスの色に染まった演奏会も珍しい。これはヨハン・シュトラウス2世がフランスで影響を發揮した成功によるものであり、時代はまさにフランス色に染まった雰囲気であった。そして、ウィーンに人びとはこのような演奏会も、ドラゴン一座の公演も一種の娯楽としていた。

## 10. 結語

詳細な演技内容や個々の演者のことはわからなかったが、1867～68年にドラゴン一座がウィーンに出演したことは明らかだ。そして、その前の旅程は、ベルファスト、グラスゴー、エジンバラ、ハンブルク、ベルリンを廻ったことしか明らかになっていない。パリ万国博覧会の地に行ったかもわからない。しかし、ウィーンの「予告広告」を思い出してみよう。「女王ヴィクトリアとその家族のパトロン」

表1：1868年1月5日のシュトラウス楽団によるプログラム<sup>23)</sup>

- 1) マイアベーアのオペラ《ユグノー教徒》のイントロダクションと合唱
- 2) ヨハン・シュトラウス2世：大ポプリ〈楽譜の入れ替え〉o.op.
- 3) オッフエンバックのオペラ《ラインの水の精》によるポプリ
- 4) グノーの〈セレナード〉初演
- 5) ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ〈美しく青きドナウ〉op.314
- 6) ヨハン・シュトラウス2世：ポルカ・フランセーズ〈愛の使者〉op.317
- 7) ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈うわごと〉op.212
- 8) ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ（・フランセーズ）〈おとり鳥のポルカ〉op.233, 初演
- 9) エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・フランセーズ〈タンツ・パローレ〉op.30
- 10) エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈波瀾に満ちた生涯〉o.op.

という言葉が冒頭にある。この言葉とロンドンが関係しているのではないか、と思われるのである。しかし、これ以上のことはここでは論じない。その代わりに、1868年1月5日付の*Konstitutionelle Volks-Zeitung*紙の1面に掲載された、ドラゴン一座の似顔絵を示しておく(図版3)。

レンツ・サーカス Circus Lenz は1842年にドイツのベルリンで創設され、設立者レンツ Ernst Jacob Renz (1815-92) がウィーンにも1853年にレオポルシュタットのGroße Fuhrmangasse (1862年にZirkusgasseと改名) にサーカス場を建てる。石造りの建物で客席3559席、屋根は自由に開け閉めできるものであった。レンツはドイツ各地やコペンハーゲンで固定施設を築き、現在でも活動が続いている。ドラゴン一座は1867年12月にそこを借りることができた。きしくも、ヨハン・シュトラウス2世がパリ万国博覧会で演奏を担当するビルゼ楽団を借りた際、1867年5月25日

にベルリンのサーカス・レンツで〈美しく青きドナウ〉を演奏した。これがドイツでの初演である。

## 注

- 1) 同ワルツは1867年2月15日にウィーン男声合唱協会によりディアナ・ザールで初演。
- 2) 「日本茶屋をつくり、そこに柳橋の芸者3名(かね、すみ、さと)を配し」た(宮永:90)。
- 3) 団体の正式名称はImperial Japanese Troupeであり、邦訳は存在しないが、本論では「帝国日本人一座」で統一する。「帝国日本人一座」については、拙稿2017で論じた。
- 4) 1867年11月1日付の*nfp*: 6, *nfb*: 14, *wrz*, *mop*, *apr*には記載がない。
- 5) 1867年12月1日付の*Der Zwischen-Akt* (S.1)に掲載された、C. G. グルックのオペラ〈*Iphigenia in Aulis*〉の場合。
- 6) 1867年12月9日付の*nfb*: 7, *wrz*に記載なし。
- 7) 1867年12月4日付の*wrz*: 8, *nfb*: 21。
- 8) 1867年12月13日付の*wrz*: 8, *nfp*: 10, *apr*: 15, *mop*: 3, *nfb*: 19。
- 9) 1867年12月15日付の*wrz*: 10, *nfp*: 9, *nfb*: 26。
- 10) 1867年12月25日付の*nfp*: 10。この新聞でだけ「おもつさん」の文字が大きくなっている。*apr*: 11, *mop*: 4, *nfb*: 17, *wrz*は記載なし。
- 11) 1867年12月29日付の*nfp*: 9。
- 12) 1867年12月25日付の新聞各紙に「サント・ペテルブルクに出発する前の公演」という下りが初めて載る。これは、昨年の拙稿で論じた帝国日本人一座が、サント・ペテルブルク行を口実にウィーンを出発したのと同じ理由にみえるが、帝国日本人一座がどこへ向かったのかが眉唾であるのに対し、ドラゴン一座が信憑性を持つ。
- 13) 三原文『日本人登場』の中に、対応する人物読解表を載せている(三原:98)。「日本のリズリー」は*Alta California*紙の説明のままである。
- 14) 徳川昭武にありあまる金があった訳でもなく、「このような破格のチップをあたえたのは、斜陽



図版3：日本ドラゴン一座

- になりつつあった幕府の威信を示し、その宣伝効果も念頭にあった」（宮原：89）らしい。
- 15) 1870年1月10日付の*Freeman's Journal* (Dublin) などによって知られる。三原：125。
- 16) 高野廣八・飯野町史談会編『*廣八日記：幕末の曲芸団海外巡業記録*』（飯野町史談会）1977。
- 17) アムステルダム生まれのオランダ人。
- 18) カリフォルニアのビジネスマン。他のメンバーは情報を集めにくい。
- 19) 1868年4月25日付の*Daily Critics*紙 (San Francisco) (p.3)。ドラゴン一座が帰国宣言を出したのは1870年1月10日付のダブリンの*Freemans Journal* 紙や*Commercial Advertiser*紙である。
- 20) 男はヒコマツ、ツルキチ、女はトミ、タケ、Mysquersyn (小山：117)。最後の女性は日本読みがわからない。
- 21) 五太夫は本名であり、神奈川奉行から第91号として御朱印を得た人物である。彼を中心にドラゴン一座がいたと思われる。大鹿：181を参照。
- 22) 安岡は著書の中でドラゴン一座のことを「大龍一座」と書いている。
- 23) 表中の作品番号は筆者が付加した。

## 参考・引用新聞

Wien: Österreichische Nationalbibliothekに所蔵される各新聞、括弧内は略号。ANNO [AustriaN Newspaper Online] = Historische Österreichische Zeitungen und Zeitschriften (<http://anno.onb.ac.at/>) で閲覧。

*Fremden-Blatt* (fdb), *Neue Fremden-Blatt* (nfb), *Der Zwischen-Akt* (zwa), *Neue Freie Press* (nfp), *Wiener Zeitung* (wrz), *Morgen-Post* (mop), *Die Presse* (apr), *Der Floh* (flo), *Kikeriki* (kik), *Konstitutionelle Volks-Zeitung* (kon)。

## 参考文献

- 倉田, 喜弘 (編) 幕末明治見世物事典. 東京: 吉川弘文館. 2012.
- 小山, 騰. 日本人村を作った男. 謎の興行師タナ

- カー・ブヒクロサン1839～94. 東京: 藤原書店. 2015.
- 日本ヨハン・シュトラウス協会. ヨハン・シュトラウス2世作品目録. 東京: 日本ヨハン・シュトラウス協会. 2006.
- ヨーゼフ・シュトラウス作品目録. 東京: 日本ヨハン・シュトラウス協会. 出版準備中.
- 三原, 文. 日本人登場. 東京: 松柏社. 2008.
- 宮永, 孝. 海を渡った幕末の曲芸団. 中公新書1463. 東京: 中央公論新社. 1999.
- 宮岡, 謙二. 異国遍路旅芸人始末書. 東京: 中央公論社. 1978.
- 三好, 一. ニッポン・サーカス物語. 東京: 白水社. 1993.
- 大鹿, 武. 幕末・明治のホテルと旅券. 東京: 築地書館. 1987.
- 高野, 廣八. 飯野町史談会 (編) 廣八日記：幕末の曲芸団海外巡業記録. 福島: 飯野町史談会. 1977.
- 安岡, 章太郎. 大世紀末サーカス. 東京: 朝日新聞社. 1984.
- 若宮, 由美. 「ヨーゼフ・シュトラウスの〈ロミオとジュリエット〉—グノーのオペラに基づくポプリ」『埼玉学園大学人間学部紀要』第14号、pp.75-87. 2014.
- 「アーベルトのオペラ《アストルガ》とヨーゼフ・シュトラウスのポプリ」『埼玉学園大学人間学部紀要』第15号、pp.151-163. 2015.
- 「1870年ウィーンにおける帝国日本人一座」『埼玉学園大学人間学部紀要』第17号、pp.163-175. 2017.
- Bauer, Anton. *Der Theater in der Josefstadt zu Wien*. Wien: Manutiuspress. 1957.
- Baile, Leigh. *Eduard Strauss: The Third Man of the Strauss Family*. Wien: Hollitzer 2017.
- Brusatti, Otto; Sommer, Isabella. *Josepf Strauss 1825-1870. Delirien und Sphärenklänge*. Wien: Holzhausen. 2003.
- Mailer, Franz. *Joseph Strauß. Genie wider Willen*. Wien; München: Jugend und Volk. 1977.
- *Johann Strauß (Sohn). Leben und Werk in Briefen und Dokumenten*. Bd.2: 1864-1877.

1867年パリ万博後のウィーンにおける日本ドラゴン一座

- Tutzing: Hans Schneider. 1986.
- *Johann Strauß. Kommentiertes Werkverzeichnis.*  
Wien: Pichler. 1999.
- *Joseph Strauss: Kommentiertes Werkverzeichnis.*  
Frankfurt a.M.: Peter Lang. 2002.
- Schodt, Frederik L. *Professor Risley and Imperial Japanese Troupe.* Berkley CA: Stone Bridge Press. 2012.
- Schönherr, Max. *Lanner, Strauss, Zieler.* Wien, München: Doblinger. 1982.
- Wakamiya, Yumi. “Ein verlorenes Potpourri von Josef Strauss: Potpourri über Motiven der Oper *Romeo und Julie*”. *Leues Leben*, Heft.51. Coburg: Deutsche Johann Strauss Gesellschaft. 2016.
- Weinmann, Alexander. *Verzeichnis Sämtlicher Werke von Johann Strauss Vater und Sohn.* Wien: Ludwig Krenn. [1956].
- *Verzeichnis Sämtlicher Werke von Josef und Eduard Strauss.* Wien: Ludwig Krenn. 1967.